

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 トルストイ『アンナ・カレーニナ 第一部、第二部』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 139 回のツイキャス読書会の課題図書は、トルストイ『アンナ・カレーニナ 第一部、第二部』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「アンナ・カレーニナ 上巻」感想文

今回初めて読みました。課題図書になるまでこの本の事を知りませんでした。

上巻を最後まで読んでいませんが途中までの感想です。

私は、アンナは、とてもしっかりした女性だと思っていたので、オブロンスキーみたいな遊び人のような人を好きになってしまったのはとても意外でした。

好きになるぐらいなら、もしかしたら誰にでもあるよくある事かもしれないけれど、アンナのような女性は軽くあしらうのだと思っていました。

たしかにアンナの旦那はちょっと嫌だなと、少ししかない登場場面でも感じました。

なんかおちゃらけて、どこに本心があるのか分からない所とか、アンナの事をほんとうに理解しようとしているのかな？ と思いました。

女性としてだけでなく、一人の人間として見てくれているのか疑問に思いました。

イプセンの「人形の家」みたいにアンナが出て行ってからやっと分かるのかなのかな？ と思いました。

後先考えられないのが恋なのかもしれないけど、アンナはそれで良かったのかな？

本当に大切な物は何なのかなと、これから中巻、下巻を読んで自分なりに分かればいいなと思いました。

(おわり)

『アンナ・カレーニナ』 感想文

美貌の貴婦人アンナ・カレーニナと青年貴族将校のヴロンスキーとの悲劇的な愛をストーリーの主旋律とすると、地方の純朴な地主リョーヴィンと貴族令嬢キティの愛が、ヴァイオリンで弾く高音域の美しい副旋律のように流れていた。

私はリョーヴィンとキティの暗礁に乗り上げた愛は理想的な方向で解決してしまいそうなので、単に読むだけにした。農場の経営についても、現在では、すでに淘汰されて思想として読み飛ばした。

アンナとヴロンスキーの二人は、どちらかといえば、私の好みに合う人物のような気がしたし、二人の愛は自然感情の発露だから、そのまま見守ってやりたい気持ちだった。

ヴロンスキーはキティとアンナの二人の女性を同時に追うこともなく、想い姫、アンナに忠誠を誓った騎士のように思えた。

男女の「神聖な世界」さえ感じた。アンナが未婚なら、バラ色の恋になっただろう。

「偉大な愛は時間に依存しない」、テレビドラマからの引用です。

なぜアンナとヴロンスキーの偉大な愛は、彼女の呪いによって変わったのか？

アンナが幸せになろうとしたことが、なぜ、彼女を含めて、彼女の周囲の人の人生を損なう悲劇を引き起こしてしまったのか？

これが、私に与えられた謎解きになった。

息子のいるアンナが直面する「恋」と「母性愛の揺らぎ」との狭間。

そして、彼女が迎える暗い結末は、1870年代の帝政ロシア社会が敷いた暗黙の規範から逸脱してしまったアンナの「道ならぬ恋」ゆえの、出口のない苦悩と恐怖とを表していると思った。

男性であるヴロンスキーには見抜けない不可視性の沈黙としての女性問題が隠されていると思った。

偏見やステレオタイプに支配された貴族世界で、アンナは困難な選択をする必要にせまられた。

トルストイは、法的に複雑な離婚プロセスである「古い習慣」を明確に批判していると思った。

それと、夫・カレーニンの社会階級の防衛行動がプラスされてアンナの周囲の人を「鳥もち」のように身動きならぬものにしてしまったのではないだろうか。

(おわり)

『老公爵が評する「ああいう手合いは機械で作ったようなもの」とはどういう意味なのだろうか』

〈岩波文庫 15 章〉

老公爵は言った。「われわれには眼がある」

老公爵はレーヴィンをまじめな考えをもっている人間だと評価する。

一方で、ウロンスキを遊ぶしか能がないがない、おっちょこちょいのうずら、青二才であり、機械で作ったようなもので、屑ばかりと酷評した。

特に気になった箇所は、ウロンスキを「機械で作ったようなもの」と評価したところ(p105 L6)。

これがどう意味なのかが私にはよくわからなかった。けれども、産業革命を経て近代化が急速に進んだ時代背景と重なるような発言で興味深かった。一瞬、チャップリンの映画で機械の歯車になっているチャップリンのシーンを思い出した。思われる人はかわいそうだなあと思った。自分はどうか。機械で作ったようなものだろうかと考えてみる。そうだったらイヤだと思った。

でも、老公爵に言ってもらってスカッとした。そう、私はレーヴィン鼻根である。不器用ながらもキチイを愛するその姿を応援している自分がある。ゾラの『居酒屋』に登場したグージュと重なる。恐れ多いが、レーヴィンと自分を重ね合わせる。

ということは、レーヴィンは「機械で作ったようなものではない」ということだろう。彼に「機械で作ったようなもの」がどういふことなのかがわかるヒントが隠されているはずだ。

地方議会に興味を持たないレーヴィン。周囲に流されないレーヴィンの姿勢だろうか。たしかに、レーヴィンは普通の人とは違うような気がする。私なら、議員になって、活躍すればキチイに認められるかもしれないと安直に思ってしまう。

人を「機械で作ったようなもの」と評価する理由が気になった今回のアンナ・カレーニナであった。

(おわり)

憐れむべき俗物へ

残り 50 ページまで読み、落馬しました。宮澤さんの解説音声も参考にしての感想文です。

俗物の、アンナから言わせたら人間ではなく機械だというカレーニンを見て私は、10 年近く前、NHK の少子化と保育所待機児童問題を討論する番組に出ているある男性を思い出した。

その人は仕事を定年退職した白髪混じりの一般人で、厳しい表情をして

「子供は 3 歳まで母親がしっかり側にいて育てるべきだ！」

と強い口調で、所謂 3 歳児神話というものを語っていた。

その発言に対し、子育て問題を追っている女性ジャーナリストに

「今の日本の男性が仕事ばかりで子育てに参加しない社会を作ったのは、祖父とその上の世代。彼らは仕事とその付き合い中心の生活で、子供を抱いた経験がない、可哀想な世代だ」

と言われてしまい、編集によりカットされたかはわからないが、子供を抱いた事ない男性世代代表として何も言い返せない、戦後生まれの、日本が成長していた頃に走り続けてきたであろう男性の表情が画面に映っていた。

仕事と付き合いで忙しいからと家事も子育ても出来なくても、家庭の長として權威をふるって来た男性が、年老いて体力が落ちた状態で病気にかかり、障害を持って自分一人では立てない、歩けない、用も足せない状態になっても家族に高圧的に接する様子を、私は幾度も見てきた。

また、共依存関係からかそれに従う妻や子どもたくさん見てきた。この光景は今後も見なくなる事はないだろう。

カレーニンはこの先も不倫相手の子を身ごもったと知りながらも、自分の社会的な道具として妻を支配し続けるのだろうか？

アンナも虚構と欺瞞の悪魔に取り憑かれたまま夫に添い遂げるのだろうか？「若いの」呼ばわりされる息子はどんな成長を遂げるだろうか？

私からしたら体裁ばかりきにするヴロンスキーもカレーニンになる素質を持っていると思う。

そして、現代の人間社会で生活しているプロレタリア階級の私も虚構と欺瞞の悪魔に取り憑かれているのではないかと気付かされ恐ろしくなった。

頑張っって残りを読み、中巻も読みたいです。以上

(おわり)

『アンナという人をどう見るか』

僕が『アンナ・カレーニナ』を初めて読んだ時、こんなに完成された小説はないだろう、と思った。構成も美しく、描写も見事、内容も深い。まさに小説の手本だ、と思った。その後、同じくらいの完成度を感じる作品や、より前衛的で刺激的な作品に触れたり、『ボヴァリー夫人』というこの作品の親がいると知ったりしても、やはり僕の中では屈指の名作のままだ。

初読時、僕はシンプルに、アンナは欲に踊らされた悲劇のヒロインで、リョーヴィンは堅実な素晴らしい人物だ、と感じた。トルストイ自身、アンナという近代的な人物を批判し、一方、自分自身を重ねてもいる、伝統的な穏やかさの中に生きようとする健気なリョーヴィンを称賛しようとして、この作品を書いたのだろう。

今でも、リョーヴィンは素晴らしい人物であり、『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャのように、人々が理想とすべきモデルであると感じる。僕自身も田舎育ちでリョーヴィンに近い境遇のところがあり、大いに共感した。リョーヴィンが農民たちと一緒に草刈りをする場面を読んだ時は、こんな素朴な田舎の様子を、こんなにリアルに丁寧に描く作家がいるなんて、と感動した。普通の作家であれば距離を置いて、「はい、田舎の様子です」と、素っ気ない描き方をしてしまうだろう。もしくはリアルに描こうとしても、ハリボテの田舎になってしまうだろう。しかしトルストイはこの草刈りの場面を、生き生きと美しく描写している。体感としての田舎がある。これは子どものころ、『となりのトトロ』を観たときに湧いた感情と似ている。都会人から見た田舎ではなく、田舎そのものをありのまま美しく、かつ下世話で庶民的なところも描いている。それだけでも素晴らしいと思ったし、田舎育ちとしては、ありがたいとさえ思った。

そしてアンナについてだが、今は初読時よりも同情を覚えている。アンナについては、以前はどう捉えていいのかわからなかった。悲劇に巻き込まれた善人なのか、自業自得の悪人なのか……？ おそらくトルストイは、初めはかなり批判的に描こうとしていたと思う。しかし、次第にアンナの運命に同情していったようにも思える。エマ・ボヴァリーに対するフローベールの愛よりも深いものを感じる。

今や、僕はこう思う。アンナは健全な、魅力的な女性だった。しかし、愛のない夫のもとで、女性としては蔑ろにされていた。運命のいたずらもあって、無意識に溜め込まれた不満や欲求が、ある日爆発した。アンナは、エマよりも真面目な女性だったと思う。しかし一般に女性は、感情に乏しい生活には耐えられないものだ。エマもアンナも、やはり女性だ。しかも美しい。そう考えると、彼女らの不倫は、自分の人生をしっかりと謳歌するための精一杯の抵抗に感じられた。彼女らに非はないのではないか。彼女らを悪としたのは社会や世間であって、彼女ら自身は魂に忠実な聖なる人だったのではないか？ キリストだって、マグダラのマリアや不倫した者を批判しなかったことは聖書に書かれているし、キリスト自身、不倫でできた子どもという説もある。

そんなことを言うとトルストイさんに怒られるかもしれないけれど、トルストイ自身も、自己制御の効いた理性的な理想であるリョーヴィンの生き方と、本能的な墮落と輝きに満ちたアンナの生き方への憧れの狭間で、苦しんだのではないかと思う。トルストイは、できればアンナの生き方を認めたくなかっただろう。トルストイの本当の意図は分からない。でもアンナは、カレーニンやオブロンスキーなどよりは、人間としてマトモだ。特にカレーニンが魂を失いすぎている。彼の妻であるには、自分も魂を殺しつづけなくてはならないだろう。

単純な善悪の判定を拒む深さや複雑さが、この小説にはある。リョーヴィンとアンナのどちらが良いかは、今の僕にとってはさほど問題ではない。二人とも精一杯自分の生き方をしたという点で、どちらも素晴らしい。立派なダブル主演と言ったところだ。大筋だけ見ればリョーヴィンを讃える内容である。だがタイトルにはズバリ『アンナ・カレーニナ』と付けてしまう辺り、トルストイはむしろアンナに、抵抗しがたく輝くような魅力を感じているような気がする。

(おわり)

『 帝政ロシアの果て ～上巻より～ 』

(引用始め)

「おまえも知ってのとおり、資本は労働者を圧迫している。わが国の労働者は、つまり、百姓は、労働の重みを一身に背負って、いくら働いても、家畜のような状態から抜け出すことはできないんだ。本来なら、彼等らは賃金によっておのれの境遇を改善し、余暇をつくり、その結果として、教養を身につけることができるはずなんだが、その賃金の余剰利得はすっかり資本家に吸い取られてしまっているんだ。

(中略)

だから、こういう制度を変革しなくちゃならないんだよ。」

< 新潮文庫(上) P.219 >

(引用終わり)

上記は、農場の地主でありながら貴族でもあるリョーヴィンの兄ニコライの台詞である。労働者の意識に目覚めていく過程として、重い言葉だ。

この小説の舞台は帝政ロシア末期である。国内の革命運動や自由思想が芽を出し始め、パリ条約のような不平等な条約を結ぶことになる事態は、日本の江戸時代末期にもいえる。体制が変わっていくのは、決して外圧だけではない。国の内側から徐々に崩壊していくさまは、清王朝末期にイギリスから阿片を仕掛けられた阿片戦争にも通じるような気がした。阿片のような直接的な麻薬ではないけれど、帝政ロシアにおける貴族階級の崩壊を「恋愛・不倫」に投影したというのは言い過ぎだろうか。

恋愛は、脳内を恍惚とした状態に導く。一種の脳内麻薬だと思うのだ。いったん、それが脳内で稼働し始めると判断能力に著しい障害が出る。それは、一対一の関係より第三者が登場することで、さらに加速する。

貞淑な大物官僚の妻として生きていたアンナは、青年将校ヴロンスキーと恋に落ちる。ひよっとすると、キチイの存在がなければ、理性で抑えられたかもしれない。独身で美しいキチイより、自分を見つめてくれるヴロンスキーの瞳に抗えなくなってしまう。

夏目漱石の『こころ』の先生もKの存在がなければ、お嬢さんと結ばれていなかったかもしれない。人間は、優越感や承認欲求にどうしても惑わされる。

小説の出だしも、アンナの兄オヴロンスキーの不倫から始まる。

「恋愛」という麻薬により、貴族階級の内側から崩壊していく不気味な伏線に思え、革命を体現しているリョーヴィンとの対立軸にも思えた。

反対に、リョーヴィンと将来結ばれるキチイは、平穏な生活を送れるらしい。

帝政ヴロンスキーより社会主義リョーヴィンの方が、未来が明るいという暗示だろうか。

だが、私たちは知っている。ペレストロイカ以降、ソビエト連邦が崩壊したことを。社会主義国の限界をベルリンの壁の崩壊と共に見つめていたことを。

まだまだ、中巻、下巻と物語は続いていく。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『復讐はわれにまかせよ、われは仇を返さん』

(引用はじめ)

彼のほうは、殺人者が自分で殺した死体を見たときのような気持を味わっていた。彼がその生命を奪ったこの死骸こそ、ふたりの恋であり、その恋の最初の段階であった。この羞恥という恐ろしい犠牲をはらって得たところのものを思い出すと、そこにはなにかしら恐ろしく忌まわしいものがあった。(第2部 11章)

(引用おわり)

リスクを冒して一緒になったのに、その手にしたものといえば、「死骸」である。男性のこの感覚というのが、よく描かれている。セックスによって男性の得るものは、川を遡るサケやマスそれに近い。傷だらけになって遡上して、射精したものの、次の瞬間には、プカプカと川面に力なく浮いているだけだ。

しかし、アンナを襲った羞恥は、彼女に一つの認識を与えた。不倫と妊娠によって与えられた認識によって、アンナの目の前に、俗物官僚カレーニンとの夫婦生活の欺瞞が、みるみる明らかになっていったのである。

(引用はじめ)

生殖に際しての女子の役割は、或る意味においては、男子のそれに比して罪が軽い。すなわち男子は生まれてくるものに対して意志を賦与するのであるが、その意志たるや原罪なのであり、したがってまた一切の害悪と災禍の根源なのである。これに対して女子の賦与するものは認識なのであり、これは救済への道を開いてくれる。

ショウペンハウエル『自殺について』岩波文庫 P. 90

(引用おわり)

カレーニンとの間にできたセリョージャもアンナにとって一つの認識である。しかし、ヴロンスキーとの間にできた子どもは、救済への道につながる認識である。

本当は、アンナとヴロンスキーは、神との関係に入り、信仰と救済への道が拓けてくる展開を期待したいのであるが、まだ読んでいないが、そういう展開はリョーヴィンのほうに描かれているっぽいので、アンナはずっと苦しむのであろう。『罪と罰』のようにシベリアでやり直すという展開にはならない。

エピグラフの『復讐はわれにまかせよ、われは仇を返さん』(新約聖書ローマ人への手紙・第12章第19節)から推察するに、神の復讐がアンナとヴロンスキーを苦しめるのであろう。

この作品を読みながら、学生時代に読んだ、志賀直哉の『暗夜行路』が思い出されて仕方なかった。志賀直哉もキリスト教をベースにした。認識と救済を描いているからだろうか。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343